

1 単元名 「幕府政治の改革と農村の変化」

2 本 時 2018 (平成30) 年 10月29日 (月) 第5校時 社会科教室

3 本時の指導観

生徒は前時まで、戦乱の世が落ち着き、武士と百姓が協力して筑後川に堰をつくるなどして新田開発を行い、農具の発明・改良をするなどして生産向上をしてきたことを学習した。しかし、財政難の久留米藩は武士も含めた領民に「人別銀」の新税を出す。

そこで本時では、地元の史実「宝暦一揆 (久留米一揆)」をもとに武士が支配する時代から貨幣経済の社会になっていくことを理解できるようにする。そのために、数万の百姓が八幡河原に結集した一揆前夜に百姓・武士・商人がそれぞれ何を考え、話し合ったのかを考え、交流することで時代をつかめさせたい。

4 主 眼

○久留米一揆 (宝暦一揆) とはどのような一揆だったのかをつかませる

○地元の歴史を学ぶことで歴史が為政者だけでなく民衆が作り出すことを認識させる。

5 どのような思考ツールを活用して、生徒の考えを広げたり深めたりするか工夫点 (本年度の重点項目)

個人・班で一揆に結集する百姓・何とか一揆を解散させようとする武士・じっと静観するしかない商人のそれぞれの立場で一揆前夜の気持ちを想像させることで意見交流をし、久留米藩に対する要求書を書く。

6 準 備 ①教科書 ②資料集 ③ふるさと小郡のあゆみ ④宝暦一揆資料

7 展 開

段階	学習活動・学習内容	具体的な支援	評価の観点(方法)
つかむ	1 (1) 新田開発をし、百姓と武士が協力して生産向上したのも関わらず、久留米藩が領民全員に「人別銀」で出したことを理解させる。	○物納ではなく金納でしかも武士も含む藩民全員に増税したことをつかませる。	
	めあて 宝暦の一揆 (久留米一揆) について学ぼう		
／ さぐる	2 「ふるさと小郡の歴史」から一揆の概要をつかませる	○「ふるさと小郡の歴史」の写真を見せる	
	3 読み物資料「百姓・伴蔵」を読んで、結集する百姓・何とか一揆を解散させようとする武士・じっと静観するしかない商人のそれぞれの立場で一揆前夜の気持ちを想像させる。	○「百姓・伴蔵」を読み聞かせる	
／ 深める	4 八幡河原に結集して、久留米に押しかけようとしている前夜、百姓・武士・商人のそれぞれがどのようなことを考え、話し合ったのかを個人そして班で考え交流する。	○班ごとに百姓・武士・商人の立場で2班ずつ分けて考えさせ、発表させる	
	5 御原郡 (地元) の嘆願書を参考に自分で嘆願書を書く	○御原郡 (地元) の嘆願書が人別銀だけでなく様々な要求書であったことを理解させる	
／ まとめる	6 嘆願書を読み上げる		
	まとめ 歴史は為政者がつくるだけでなく民衆も作り出す		

【授業の実際】

○つかむ段階について（既習事項とのズレ・隔たりから内面に生じた問い・課題を設定する場面）

本時では久留米藩でおきた宝暦一揆（久留米一揆）を学習した。地元の歴史教材である。久留米藩では新田開発に重点を置き、宝満川にある稲吉堰を造ったり、地元の土壌にあった農具の開発「がんづめ」などを行うなどして武士と百姓が協力して生産向上を行ってきた。しかし、経済発展が進み米だけの生産ではなく商品作物を作るなど商人の力が増してくる。時代は力で支配する時代から、経済が社会の中で大きな位置を占めるようになっていくことをとらえさせたい。そのことを小郡市製作の「ふるさと小郡のあゆみ」を使うなどして遠くで歴史が起こるのではなく地元の風景が浮かぶような課題づくりはできた。

本時ではさらに読み物教材「百姓・伴蔵」を使い、享保の一揆で百姓の要求を飲んで、増税出来なかったのになぜ新たな税しかも物納ではなく金納として「人別銀」を出したのかを探らせた。

○さぐる～深める段階について（思考ツールを活用して自己内対話をする場面）

読み物教材「百姓・伴蔵」を読んで一揆で「人別銀」をはじめた皆さんの要求を突き付け立ち上がる百姓、何とか一揆を解散させようとする武士、じっと静観するしかない商人の3つの立場で八幡河原に一揆軍2万の一揆が久留米城に迫る前夜「何を考えて夜を過ごしているのか」のテーマに結集する百姓・一揆を解散させようとする武士・静観するしかない商人のそれぞれ6班を2班ずつに分けて考え前で発表することができた。資料2のような意見だけではなく「他の藩に助けを求める」「やばい」など武士が力で抑えることができなくなっている状況や商人が「武器を売って儲けよう」などたくましく生き抜く姿も意見として出された。

資料1 発表時の黒板の様子

資料2 生徒のノートより

○まとめる段階について（自分の言葉でまとめる場面）

地元の古文書「塩足文書」に御井、御原郡嘆願書がある。意識したものを例として例示して自分で嘆願書を書くことをまとめとした。生徒の嘆願書には人別銀を取りやめはもちろんであるが「年貢の引き下げ・農具の提供・協力しての生産向上」など様々であった。しかし、久留米藩は人別銀を取りやめ、みんなで要求することで社会・時代を動かすことができること、歴史は為政者だけでなく民衆もつくりだすことは引き出した。

【授業の考察】

宝暦一揆（久留米一揆）がなぜ、どのようにして起きたのかについては導入としてはつかませることはうまくいった。一揆は、一般的には百姓VS武士の構図にとらえることが多い。しかし、「人別銀」という新課税が一揆の原因である。経済が影響を及ぼすこと。時代背景を考えると支配はされてきた百姓も支配してきた武士も貨幣経済の中で生活するようになり、江戸幕府の支配体制に限界が来ていることを示すものであることは間違いがない。

一揆が終結して、しばらくして一揆の首謀者（リーダー）の処罰を行う。体面を気にする武士の本性が出たといってもよい。そして、首謀者の中には権力側と見られていた村役人の庄屋も多くいた。

【成果と課題】（授業整理会およびチェックシートから明らかになったこと）

（成果）☆生徒たちが自由に自分の考えを出し合い、要求書を書くことができた。

☆地元の歴史を小郡市製作の「ふるさと小郡あゆみ」や「百姓伴蔵」を使うことで身近に歴史を感じることができた。

（課題）★意見はたくさん出たが、学習が社会構造の変化まで踏み込めなかった。

★自分で要求書をつくるということの難しさや何を要求するのかを十分にとらえきれない生徒がいた。今後も歴史と今の生活をいかに結びつけるのかについては取組みを続けたい。